

## ヴァージニア・ウルフ『自分だけの部屋』 (*A Room of One's Own*) の考察 (1)

— ウルフと声なき女性たち —

外国語科目 (英語) 池田 豊子・十日市 健助

### Thoughts on Virginia Woolf's *A Room of One's Own* (1): Woolf and Anonymous Women

Toyoko IKEDA & Kensuke TOKAICHI  
Department of Foreign Languages (English)

This paper is on Virginia Woolf's *A Room of One's Own* published in 1929. In it she has two main topics to deal with: women's plight, in patriarchal England, in their efforts to be creative contributors to literature, especially poetry; and the concept of literary androgyny propounded by Coleridge, the 19th-century British poet-critic. Focusing on Woolf's first topic (the second will be discussed in a subsequent paper), the coauthors first introduce her message to her audience (and readers) then — women needed to venture into whatever field of enquiry that interested them most and strive to be independent thinkers by earning an income large enough to free themselves of financial dependency — and discuss in some detail the implications that the message could have on us — men as well as women — at the threshold of a new millennium.

### はじめに

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882 - 1941) は、20世紀初頭に活躍した代表的イギリス女流作家である。ジェームス・ジョイス<sup>(1)</sup>と共に、意識の流れ (stream of consciousness<sup>(2)</sup>) の手法を用いて人間の内面の描写に挑戦し、1941年3月の末ウーズ川<sup>(3)</sup>に身を投げて自殺するまでに小説9篇のほか多数の評論、伝記、日記などを残した。シェイクスピアやディケンズと異なり、一般にウルフは、技巧に偏った近寄りがたい知的サロンの作家と考えられている。しかし、その評論に明快に語られているウルフの声は、内省的ではあるが、多くの無名の女性たちとの連帯に強い思いを馳せるものである。ウルフほど、女性がものを書くことを闘いとして意識し続けた作家はないように思われる。

本論でとりあげるエッセイ『自分だけの部屋』(*A Room of One's Own*) は、1928年5月にケンブリッジのニューナム・カレッジ芸術協会で行われた講演と、同年10月のガートン・カレッジでのオドター<sup>(4)</sup>の講演に加筆・訂正し、1929年10月に出版されたものである。1931年の『女性にとっての職業』(*Professions For Women*) と併せて、英文学の歴史を彼女なりに振り返るものとなっている。さらに、自分の作家としての苦悩を語り、また、声を上げることのできなかつた、つまり歴史の中ではほとんど何も書き記されることのなかつた女性の

声に耳を傾けることの重要性を述べる下りが随所に見られる。ウルフのそのようなメッセージを分析し、20世紀最後の年もやがて暮れようとしている現在、この70年間、批判も含めて注目され続けてきた彼女の魅力の一端を探りたい。

この小論では、第Ⅰ章で『私だけの部屋』（以後AROOと記す）が書かれた時代背景を、第Ⅱ章でエリザベス朝以来の女性作家のあり方をウルフ流にまとめたものを紹介する。ここでは特に、あまり有名にならなかった作家、さらに全く歴史に記されなかった女性たちへの思いが表わされている箇所を追いながらいささかの分析を試みたい。そして第Ⅲ章では、1929年当時の今と未来に生きる若い女性エリートたちにウルフが何を伝えているかを述べる。最後に第Ⅳ章では、現在の我々自身がウルフのメッセージをどう考えるか、ウルフをどんな風に読むことが可能かをまとめることにする。

## I

リンダル・ゴードンは、ヴァージニア・ウルフの評論活動の主眼は、「鈍感・謙遜・専門家の言葉に従順といった一般読者側の受動的な態度をなくすこと<sup>(5)</sup>」であったとし、その他に二つの目標があったとしている。一つは「ヘンリー・ジェイムスの跡を継いで、小説を大芸術にすること」であり、もう一つは「女性の伝統を確立すること」だったとしている。ゴードンは、ウルフの手法そのものが、つまりAROOで取り上げている様々なテーマを独特の切り口で、歴史の埒外におかれた女性の状況を鮮明にしている書き方そのものが、彼女たちが長い間閉塞感・疎外感・失意に生きたその無念に対する抗議となっているとしている。

1929年は、ウルフ47才の時である。彼女は1912年30才でユダヤ系のレナード・ウルフ(Leonard Woolf)と結婚し、33才で『船出』(Voyage Out)を出版した。1914年からの第一次世界大戦、そして大戦終結の1918年に婦人参政権法案が議会を通過し成立した状況の中で、女性はだれ一人19世紀末以来のこの運動に無関心ではいられない政治的状況であった。この法律の制定により、まさに法律上では男性と同じ権利を獲得したものの、女性からすると社会は依然として男性中心に機能し続けており、ウルフは、そうした男性中心の社会こそが彼等の権力への志向を促し、ついにはファシズム・ナチズムに道を譲り、戦争による問題の解決を当然視するようになっていた。ユダヤ人であるレナードとの結婚により、夫はもとよりヴァージニア自身も、ヒトラーの迫害リストに載せられたにもかかわらず、ウルフは全ての戦争に反対を表明した。イギリスがドイツと戦うことにも反対したのである。平和主義者(pacifist)と言われるゆえんである。そして視点を国内に向け、イギリスでの家父長的な考え方が、ひいては戦争につながっていくのではないかとの思いを強め、様々な制度への強い疑問を抱き続けたのであった。

作家としてのウルフの仕事から見ると、講演の一週間前に出版された『オーランド』(Orlando)が彼女自身の予想に反して好評であったことと前作『灯台へ』(To the Lighthouse)の成功とがあいまって、この講演の聴衆は熱烈にウルフを迎えたと言われ、ウルフの語り口も自由、闊達である。

## II

女性と小説についての講演の調べものをしようとロンドンのBritish Museumの書架の前に立つ私という設定で、英国の書物の歴史を振り返りはじめる(第3章)。ただその前に、オックスブリッジ<sup>(6)</sup>の大学寮で芝生を横切ろうとして典礼係に阻止されたこと、また図書館の入口の銀髪の紳士には、男性の同伴者と一緒かれっきとした男性からの紹介状なしでは入館できないと門前払いを受けたことを述べ、ウルフは、女性を男性の従属物(chattels)と見なす社会での一人の女性として味わわされた屈辱を明記することを忘れてはいない(第1章)。

女性は太古から、あらゆる詩人の様々な作品において輝いており、文学において最も靈感に富んだ言葉のいくつか、最も深遠な思想の一部は女性の口から語られている。エリザベス朝を振り返ってみると、男性二人に一人が自ら詩歌を作った時代なのに、なぜ女性には誰一人詩を作る人がいなかったのかと疑問が投げかけられる。

For it is a perennial puzzle why no woman wrote a word of that extraordinary literature when every other man, it seemed, was capable of song or sonnet.<sup>(7)</sup> (38)

想像の世界ではこの上もなく偉大で個性的な女性が描かれているのに、現実の世界ではどうであったのか。

トレヴェリアン<sup>(8)</sup>の『英国史』(*History of England*)をひもといてみる。歴史とは何か。それは勿論、文字言語によって書き手あるいはその書き手に直接指示を与える立場の誰かが、後世に残すに足ると判断した出来事の記録であるが、歴史は女性にはほとんど言及していない。荘園裁判所、解放耕地農業、十字軍、大学、下院、百年戦争、バラ戦争、文芸復興期の学者たち、修道院解放、農地および宗教をめぐる争いなどが主に記載されている。それらに混じってたまにエリザベス、メアリなどの個々の女性の名があげられているが、身分の高い女性ばかりで、多数いたはずの中流階級の女性はまったく見当たらない。

ここでウルフは、シェイクスピアに兄 William と同じ文筆の天分に恵まれた妹(仮にジュディスとする)がいたと仮定してみる。ウルフは、この兄同様に芝居好きの若い娘が「自分も役者に…」とロンドンに出ていったとして、その末路を演出してみせる。ジュディスは当然ながら、役者になるための職業上の訓練はおろか、自分の真剣な気持をまともに取り合ってもらえずに、ついには身を「もちくずし」野垂れ死にするのがオチであろうとしている。ただ男性でも、シェイクスピアのような才能は、無教育で奴隷さながらの労働を強いられている人々の中からは決して生まれては来ないとし、暗黙のうちにエリート階級のみを想定していることが知れる。女性の場合、どんな才能のある人であれ、16世紀のイギリスでその才能を著作という形で発揮しようとするれば、他人から妨げられ、自分が自分を苦しめてしまったであろうとしている。その時代詩作の天分を生まれながらに具えた女性は、不幸な女性であり、己といがみ合う人間であり、人生のあらゆる状況も自ら

の天分・本能も頭や心にあるものを解き放つのに必要な精神状態とは相容れないものであった。それをよく表わしている、17世紀に書かれたウィンチルシー伯爵夫人<sup>(9)</sup>の詩がある。

Alas! a woman that attempts the pen,  
Such a presumptuous creature is esteemed,  
The fault can by no virtue be redeemed.  
They tell us we mistake our sex and way;  
Good breeding, fashion, dancing, dressing, play,  
Are the accomplishments we should desire;  
To write, or read, or think, or to enquire,  
Would cloud our beauty, and exhaust our time,  
And interrupt the conquests of our prime,  
Whilst the dull manage of a servile house  
Is held by some our utmost art and use. (54)

ウルフはここで、このウィンチルシー伯爵夫人と同時代のキャベンディッシュ公爵夫人<sup>(10)</sup>を取り上げる。そして、公爵夫人が詩に対する情熱を持て余し、孤独と歯止めのなさの中で窒息し気が狂い、自分の館に閉じこもってしまったことを我々に伝える。転じて、ドロシー・オズボーン<sup>(11)</sup>の書簡集にふれ、アフラ・ベイン<sup>(12)</sup>へとすすむ。ウルフはこのアフラ・ベインの先駆的な役割に特別な敬意を払っている。ベインは、運命の悪戯から男性に伍して生計をたてる羽目になり、さらに、ものを書くことによって当時の女性に求められていた慎み深さを犠牲にはしたものの、お金を得て自立できることを社会に示したのである。17世紀後半のイギリスでは、実に画期的なことを成し遂げた女性であった。

And with Mrs Behn we turn a very important corner on the road. We leave behind, shut up in their parks among their folios, those solitary great ladies who wrote without audience or criticism, for their own delight alone. We come to town and rub shoulders with ordinary people in the streets. Mrs Behn was a middle-class woman with all the plebeian virtues of humour, vitality and courage; a woman forced by the death of her husband and some unfortunate adventures of her own to make her living by her wits. She had to work on equal terms with men. She made, by working very hard, enough to live on. .... (58)

18世紀が近づくにつれて、アフラ・ベインを先達として何百人という女性が、外国語の書物を翻訳したりおびただしい数の下手な小説を書いたりして、あるいは自分の小遣いの足しにしたり、家計の窮状を救ったりした。

..... Aphra Behn proved that money could be made by writing at the sacrifice, perhaps, of certain agreeable qualities; and so by degrees writing became not merely a sign of folly and a

distracted mind, but was of practical importance. A husband might die, or some disaster overtake the family. Hundreds of women began as the eighteenth century drew on to add to their pin money, or to come to the rescue of their families by making translations or writing the innumerable bad novels which have ceased to be recorded even in text-books, but are to be picked up in the fourpenny boxes in the Charing Cross Road. (59)

時代が下って18世紀後半には、女性たちがシェイクスピアに関するエッセイの執筆や古典の翻訳などを手掛けるようになり、世紀の末にはついに中産階級の女性たちがものを書き始めるという画期的な変化を見るに至ったのである。

ウルフは、これら無名の女性たち・無名に近い女性たちがいなかったら、我々がよく知っており現在でも古典として読みつかれている19世紀の女性作家群 — ジェイン・オースティン、ジョージ・エリオット、エミリー・ブロンテ、シャーロット・ブロンテ — は生まれていなかったらとされている。無名の女性たちの貢献を非常に高く評価していて、ある意味で彼女たちは、十字軍やバラ戦争以上に重要だと言い切る。傑作はそれだけが単独で生まれ出づるのではなく、むしろ長い間大勢の人々の考えたことの成果であり、一つの声の背後には、多数の人々の経験があると綴っている。文学が、ある民族の文化(culture)の中心近くに位置するものとすれば、それに熟成過程(cultivation)が必要とするのは至極もっともな考えではある。そしてウルフは、全ての女性にアフラ・ベインの墓に花を捧げるように檄を飛ばす。なぜなら、貞淑を犠牲にして最初の一歩を入れ、自分の意見を率直に述べる権利を女性の手勝ち取った人々の代表がアフラ・ベインなのだから。ウルフの最も有名な言葉となった「年収500ポンド<sup>(13)</sup>」という、このエッセイのエッセンスへと極く自然につながっている。

..... For masterpieces are not single and solitary births; they are the outcome of many years of thinking in common, of thinking by the body of the people, so that the experience of the mass is behind the single voice. .... (59-60)

次にウルフは、なぜ詩作ではなく小説だったのかという点について考察する。19世紀の女性小説家は中産階級に属し、その家庭には家族共有のスペースとしてはただ一つの居間しかなかったと推察し、ありとあらゆる邪魔が起こりうる場所での集中は難しく、それで彼女たちの書くものが書き継ぎが可能な散文や小説になったのであろうと分析している。また、叙事詩、詩劇などの古い文学形式に比べ、小説だけが歴史が浅く、女性の手で左右することができたのではないかと推論している。

### III

第5章でウルフは、現在活躍中の作家の作品の並んだ書架に歩を進めている。女性につ

いては男性の紳士録に当たるものや大学便覧などが存在せず、容易にその証拠を提示することはできないものの、高度に発達した極めて精緻な創造力を持っていることを強調している。ただここで、少々力んでいる自分をたしなめることを忘れないのがウルフらしい。女性の手になる書物の分野が、文学や伝記はおろか旅行記・経済学・科学さらには哲学にさえも及んでいることを見て、ウルフは、彼女たちがものを書くことを自己表現の手段として捉えた時代が終り、それを技能と考えるようになった、つまり、ものを書くことを適性と訓練によって手につく職と捉える時代の到来をみて、我が意を得たりの表情をみせるのである。そして、そんな女性一人一人が持つどの部屋からも、この上なく複雑な創造力が舞い上がるだろうと断言している。次の文ほど、沈黙を強いられた無名の女性たちの創造力の解放をウルフが力強く語った言葉はないように思われる。

..... For women have sat indoors all these millions of years, so that by this time the very walls are permeated by their creative force, which has, indeed, so overcharged the capacity of bricks and mortar that it must needs harness itself to pens and brushes and business and politics. But this creative power differs greatly from the creative power of men. And one must conclude that it would be a thousand pities if it were hindered or wasted, for it was won by centuries of the most drastic discipline, and there is nothing to take its place. .... (79)

ウルフはまた、伝記にも歴史にも触れられていず、全く人々に知られていない生涯こそ小説に書きとめるべきだとする。

All these infinitely obscure lives remain to be recorded, I said, addressing Mary Carmichael as if she were present; and went on in thought through the streets of London feeling in imagination the pressure of dumbness, the accumulation of unrecorded life, whether from the women at the street corners with their arms akimbo, and the rings embedded in their fat swollen fingers, talking with a gesticulation like the swing of Shakespeare's words; .... (81)

前述のとおり、女性の著わした書物がほとんどあらゆる分野に及んでいることを示す書棚の中からウルフが次に選んだのは、メアリー・カーマイケル<sup>(4)</sup>の*Life's Adventure*であった。メアリー・カーマイケルはウルフの想像力が生んだ作家であるが、ウルフが最も自分の言いたいことを自由に表現するのに、己の分身として彼女を想定したと考えられる。常識的には、著作は別々にそのおのおのの長所短所を判断するのが習わしであるが、ウルフは、異なる著者の書いた本も互いに連続したものと捉え、その視点でメアリー・カーマイケルが女性作家たちの後裔として何を受け継いだかを見ようとしたのである。

メアリー・カーマイケルは「天才」などではなく、シャーロット・ブロンテ、エミリー・ブロンテ、ジェイン・オースティン、ジョージ・エリオットのような自然への愛、もえあがる想像力、奔放な詩情、きらめく才気、思索する叡智といったものは持ち合わせていなかった。にもかかわらず、ウルフはメアリー・カーマイケルに注目する。*Life's*

*Adventure* には、女性の同性愛的な関係を仄めかす下りがあるのだが、実は、これによって女性の文学上の描写が初めて実物大になったとウルフは考えるからである。文学上の女性がいかに素晴らしいことを語っても、男性の視点だけから描かれた女性はどこかに「死角」を秘めている。実に何気ない女性同士のやり取りなど、詩作に没頭する男性には知る由もないではないか、とウルフは言うのである。

さらに、メアリー・カーマイケルには50年前の才女達が享受できなかった利点があるのだ。屋根に上って、自分の手に入らぬ旅行体験や男なら易々とできたいろいろな経験についてもどかしい思いをする必要はないし、世間および人間の性格についての知識に思い焦がれて心の平安を乱す必要もなかった。彼女は、大気中に背を伸ばしたばかりの植物のように、眼前の光景の一つ一つを楽しみ、埋もれていたものを日向に誘い出し、女性として書いていながら、ことさら自分が女性であることを意識しない女性としてものを書くという画期的なことをやってのけたのである。教授・長老・教師達一みな男性だが一の警告、忠告が彼女に向かっておびただしく浴びせられるのを、彼女は鳥のように脇目も振らずに跳び越える。すると、向うにも「垣」があり、またその向うにも「垣」がある。ウルフは、メアリー・カーマイケルが天才どころか、金も暇もない身で、寝室兼居間で懸命に処女作を書いている無名の女性であることに言及し、もし彼女に「自分だけの部屋と年500ポンドの収入」があれば、百年後には詩人になると言っている。

Give her another hundred years, I concluded, reading the last chapter — people's noses and bare shoulders showed naked against a starry sky, for someone had twitched the curtain in the drawing-room — give her a room of her own and five hundred a year, let her speak her mind and leave out half that she now puts in, and she will write a better book one of these days. She will be a poet, I said, putting *Life's Adventure*, by Mary Carmichael, at the end of the shelf, in another hundred years' time. (85)

このようにウルフは、第5章までのところでなぜ女性詩人が出現しなかったかの理由をイギリス社会の家父長的な特徴にもとめた。男性のchattelsの一項目とされていた女性にとって、小説を書くことすらとても厳しいものだったのに……と環境が整備されていないことを第一と考えたのである。それを変革するには「年500ポンドの収入と、自分だけの部屋」が必要だと繰り返している。年収500ポンドとは、些末なことに煩わされずに瞑想する力を表わし、ドアに鍵のかかる自分だけの部屋は自分の頭で思考する力を示している。

最終の第6章は、10月のある日街角で一人の娘と一人の青年がとても自然にタクシーに乗り込んで一つ方向に走り去っていくのを偶然見かけ、ずっと考え続けてきた「精神の統一・調和」について、つまり、何ら抑制の必要のない苦勞なく保っていける精神状態について考える。ひいては本小論の続編となるべき「両性具有」のテーマへと進むのであるが、これは、コールリッジ<sup>(15)</sup>の「偉大な精神は両性具備」の考え方を、ウルフらしく詳しく展開したものである。

ウルフは言い切る。詩は知的自由の中でこそ生まれ、女性は太古の昔から知的自由に欠けていた。昔の名もない女性たちのことを知りたいのに、誰もその手掛かりすら残してくれていない。さすがに、ヴィクトリア朝まで時代が下ると、女性を巡る状況は大いに異なったものになる。フローレンス・ナイチンゲール<sup>(16)</sup>を社会に連れ出したクリミア戦争<sup>(17)</sup>と、一般の女性に扉を開いたヨーロッパ大戦のお陰で、こうした弊害 — 市井の女性についての記録の欠如 — は正されつつある。もっとも、権力志向の男性が好んで用いる究極の問題解決手段である戦争こそが、女性詩人の出現の可能性を高めてくれる皮肉を、ウルフが意識したかは記されていない。

ウルフは、聴衆である若き女性たち — 女性エリートたち — に向かって、どんな小さなことでも、どんな大きな題目でも、ためらわずに、あらゆる種類のことを書くように、そして何とかして、自分の収入を持ち、自分だけの部屋を確保し、旅行したり、ぼんやりしたり、世界の未来・過去に思いを巡らすなど、思索し続けてほしいと手向けの言葉を贈る。あなた方の無知は目にあまる、私たち総体としての女性はまだまだ知らないことが多すぎる、何によらず「書き込みが全く足りない」とでも言いたげに檄をとばす。そして、古代ギリシャのサッフォー<sup>(18)</sup>、紫式部、エミリー・ブロンテなどへの連帯を強調する。これら先輩作家たちは皆、創始者であると同時に継承者であり、女性が自然にもものを書く習慣があればこそ存在した人々であるとし、あなたたちもその後継者としてものを書き続けてほしいと結んでいる。あなた方一人一人が未来に影響を与えるのだと。

ウルフは、女性の無名なところが特に好きだとし、シェイクスピアの仮の妹ジュディスの話を再びとりあげる。一行の詩も書くことなく十字路傍に埋められたこの詩人は、今なお生きていると信じると語る。彼女はあなた方の中に、私の中に、そして特に、お皿を洗ったり子供を寝かしつけていてこの場にいない他の多くの女性たちの中に生きているのだ、と。

..... Now my belief is that this poet who never wrote a word and was buried at the cross-roads still lives. She lives in you and in me, and in many other women who are not here tonight, for they are washing up the dishes and putting the children to bed. .... (102)

偉大な詩人は永遠に死なず、再び私たちだれかの肉体を借りて現われる機会を必要としている。その機会を与えられるのは私であり、あなたである。貧しくとも無名であろうとも、彼女の再来のために努力することはやり甲斐のあることであると結んでいる。

..... for great poets do not die; they are continuing presences; they need only the opportunity to walk among us in the flesh.<sup>(19)</sup> ..... I maintain that she [the dead poet who was Shakespeare's sister] would come if we worked for her, and that so to work, even in poverty and obscurity, is worth while. (102 - 103)



歴史を振り返り、多くの女性の連帯、さらに、真に調和ある男性・女性の質的平等の理想を視野に入れ、若い女性たちの物質的自立と、精神の自立へのメッセージを、時に軽妙に、時に力強く伝えているのである。

#### IV

AROOは、あの知的環境に恵まれた女性ウルフが、こんなことを考えていたのかとマーガレット・ドラブル<sup>(20)</sup>に感動を与えた。その評価に紆余曲折はあったものの、1970年からはウルフの考えに共鳴する読者は多かった。現在でも、声を上げる手段を持たない人々(男性も女性も)、状況により自己表現を躊躇する人々が多いと思われる。「女性が小説なり詩なりを書こうとするなら、年に500ポンドの収入と、鍵のかかる自分だけの部屋を持つ必要がある」というメッセージは、単に著作の勧めの場合に限らず、女性が自己を確立・解放し、自立して人間存在を続けるための必要条件とウルフは考えたと言える。彼女の周りの男性たちにとっては、それはほとんど自明のことであった。ウルフ自身の考察に戻って考えると、上の第Ⅱ章で述べたように、イギリスの女性にとって先駆的な役割を果たしたアフラ・ベインの存在は特に大きいものがある。アフラ・ベインという作家は、文学辞典をひもとけば調べることができるが、普通の人々にとってはあまり馴染みのない人物であろう。そんな人物に見事に焦点を当てたところがウルフのウルフたる所であり、女性の無記名性をいたわり、それに心底からの理解を示したウルフがドラブルを感動させたのも当然と言えよう。

一つの傑作が生まれるには、ある種の必然性を要するというのがウルフの考えである。ここで女性の手になる傑作に対象を絞ると、それに至る必然性の一部に無数の女性たちの声、レンガと言わず大理石と言わず家の壁や床に染み込んだ彼女たちの積年の無念・疎外感・怨念が含まれているという主張も、上に見た無記名性への温かい眼差しに通じるものである。と同時に、「もの言う手段を持たざりし女性たち」を、傑作という建造物に捧げられた人柱に見立て、それを強いた男性への痛烈な告発と取れないこともない。アルバニア出身の作家イスマイル・カダレの *The Three-Arched Bridge* に描かれる、漆喰で覆われた人柱の文字どおりのデス・マスク<sup>(21)</sup>を想起させる迫力をもって迫るものがある。

傑作に至る必然性をより真っ当に解釈すると、そしてそれは多分ウルフの意図により沿ったものであろうが、必然性とは熟成過程なりである。つまり、文学がある民族の文化(culture)の核をなす一要素だとすれば、文学作品は作物に当ることになり、それは、育み・熟成(cultivation)なしには収穫に至らないという考えである。単に文学作品を生み出す陰の原動力が無名の人々の思いの集積であるにとどまらず、社会制度もまた促成栽培ではどっしりとしたものを築き上げることはできず、時間をかけた熟成を必要とするのであろう。文学作品の上でシェイクスピアの傑作を見るまでに、英語は、言語的にも、またそれを操る話し手・書き手の心構え(psyche)の点でも大きな変革を遂げているのである。紀元450年頃に始まったとされるアングロサクソン人たちの現在のイギリス諸島への侵攻以来、姉妹語とも言うべきスカンジナビア系の言語との接触・混交、従姉妹語と言ってもよいノルマ

ンフランス語との接触・混交を経、さらに「ベオウルフ」とチャーサーの誕生を経験しているのである、イギリス人の総体は。これに対して、総体としてのイギリス女性の文学の生産者としての経験は、量的にも質的にも哀れなほど貧弱だ、これからは目的意識をはっきりと持ってそれを豊富に豊かにしていこうと、ウルフは言っているのだ。時の流れを早めてでも、という些かの気負いが感じられるものの、我々には、ウルフが1215年の Magna Carta<sup>(22)</sup> 以来じっくりと民主主義 — 階級社会を容認しながらとはいえ — を熟成したイギリス社会の申し子のように思えてならない。

同様の論理で考察するなら、「年500ポンドの収入と自分だけの部屋」プラス「知的好奇心」プラス「(100年ほどの)時間」で、多くの女性が詩を自由に紡ぎ出すようになれるかどうかは即断できないと、ウルフは内心では思っていたかも知れない。メアリー・カーマイケルに女性詩人への夢を託したのであるが、彼女が「逸材」でないのをウルフは痛いほど感じていたのだから。歴史的に考えると、詩作との関連で「空間的移動の自由」という要素の重要さは無視できない。叙事詩が詩作の原点と考えられるからである。移動の自由の欠如—男女の役割分担の帰結であったろうが—こそが、女性を詩的処女の状態に追いやった一つの大きな条件と言えよう。自由な移動は、多種多様な刺激をもたらし、さまざまな知的好奇心につながり、それが、新たな旅への希求に結実し、時に詩作に至ることにもなるのではないだろうか。

前出のカダレに *The File on H*<sup>(23)</sup> という小説があるが、これはアルバニア文化における吟遊詩人 (rhapsode) の果たした役割についての話である。アルバニア人は、自分たちがヨーロッパ最古の民族であることを固く信じ、それを非常に誇りにする人たちである<sup>(24)</sup>。実は、題名のHこと古代ギリシャのホメロス (Homer) の叙事詩こそは、アルバニアの古来からの伝統の吟遊詩人の詩う叙事詩と同じ範疇のものであると言うのである。イリアス (the Iliad) の第一行目に「恨み」を意味するアルバニア語の単語が借用されて<sup>(25)</sup>いたり、トロイのヘレンにまつわる話は、アルバニア女性 Ajukna の話の四変種の混合されたもので、混乱をきたしている<sup>(26)</sup>というのである。ちなみに、隣接して住み、民族浄化で悪名高いセルビア人たちも同様の吟遊詩人を有すると言われるが、民族としてはより新しい。直接的影響の有無は措くとして、古代アルバニア (イリュリア<sup>(27)</sup>) ・ 古代ギリシャ → 中世フランス (minstrel) → イギリスという流れだけを考えても、シェイクスピア (Bard of Avon) の時代までにざっと2500年の時間の経過をみているのである。

*The File on H* の中に、ある吟遊詩人が二週間 (fortnight) の時間を経て、同じ場所に戻ってきて同じ物語を詩う下りがある<sup>(28)</sup>。しかし、彼の口から出る単語は必ずしも一辞一句同じではない。二週間ほどの経過時間内でもあるはっきりとした省略・変更が認められ、ましてやより長い時間の経過の中では、詩人自らが詩う物語を自分なりに創作し直すことがあっても不思議はないのである。一人の吟遊詩人の、短く見積って二三十年の吟遊生活の間に行なわれる創作活動の質と量だけを考えても、その蓄積はかなりのものになる。やはり2500年の歴史は重い。勿論、人間の想像力は2500光年をもものともしないのではあるが……ウルフだったらそう考えたかも知れない。

このエッセイのもう一つのイメージとして、まだ見ぬ世界への憧れ、いや、好奇心を持ち、その追及のために行動することへの強い勧めがある。ウルフは、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』の一節を引用している。ジェインが屋根に上って、野原の彼方を眺め、憧れる場面である。「あの境界の彼方を見透かす力、これまで話には聞くもの見たことのない忙しい世界、生活に充ち溢れる町や地域までにも届く視力がほしい」と。彼女の好奇心・想像力の逞しさが、己の実際の生活空間の狭隘さを屈服させようとしている場面である。(かつて、ジェイン・エアの生まれたヨークシャーの嵐ヶ丘の一面のヒースの連なりを目の前にした時、彼女の叫びに得心したものであった。)

.... And then she longed — and it was for this that they blamed her — that 'then I longed for a power of vision which might overpass that limit; which might reach the busy world, towns, regions full of life I had heard of but never seen: that then I desired more of practical experience than I possessed; more of intercourse with my kind, of acquaintance with variety of character than was here within my reach. ....' (62)

『ジェイン・エア』に比べるとやゝ感傷的になるが、上田敏の訳で有名なカール・ブッセ<sup>(29)</sup>のあの「山のあなたの空遠く／幸い住むと／人の言う.....」がある。これらは、いずれも日本の山岳地方に昔からあったと言われる「峠の思想」と共通のものであろう。あの峠を越えれば違う世界がある、幸せが手に入るはずだ、と山国の人々は考えた。特に、場違いな能力か野心に、幸か不幸か、恵まれて生まれた若い男性たちがそう考えたのである。ウルフは、(少なくとも自分の周りの)男性はみな、男性に生まれたが故に峠の向こうに行くことができた、行って果たして幸せがあるのか確かめることができた、エリートであるあなた方若い女性たちもそうできるのよ、そうすべきよ、と語るのである。たとえ思い通りの結果にならなくても、その失敗譚を書けばよいではないかと言うのである。女性の文学創出者としての量と密度を高めるために。シャーロット・ブロンテは、『ジェイン・エア』によって私たちの知るところとなっているが、幾多の女性たちがジェインのそんなもどかしさに苛まれていることだろう。今も、自分が現に見ている生活の向うに何かあるのではないかと、思い続けている人々は多いはずである。

AROOに次いで『女性と小説』(*Women and Fiction*)が同じ1929年に出版された。両著共に、女性の声を押さえつけ消そうとした歴史への異議申し立てになっている。ただ、前述のとおり、戦争という歴史上の展開によって女性たちの活躍の場が格段に拡がり、ウルフが希う状況が現実のものとなりつつあったのは、実に、逆説的な成り行きと言わざるをえない。

1933年10月29日のウルフの日記には「とうとう匿名性の哲学をつかんだ<sup>(30)</sup>」とあり、

.... let me remember ..... also that I have, at last, laid hands upon my philosophy of anonymity.

1937年2月19日付けでは、「.....新しい評論の書き方の萌芽を見るが.....その成果を、公にす

るまでは純粹に保ちたい。新聞紙上に発表するために書くとなると、構えてしまう。<sup>(31)</sup>」との言葉が記されている。

‘..... theres in my drawer several I think rather good sketches; & a chapter on biography. Clearly I have here in the egg a new method of writing criticism. I rather think so. I feel that I want some private way of producing these studies; these adumbrations. If one writes them for a paper the attitude changes. ....’

ゴードンも述べているように<sup>(32)</sup>、ウルフは自意識にとらわれず詩い、また、語る詩人と名もない田舎の聴衆に豊かな原点を見出し、その後、小さな声の重要性をますます強く感じていくことになる。

Virginia Woolf の *A Room of One's Own* は、フェミニズムの視点から様々に論じられることが多いが、この小論では、ウルフの思い、声にならない声・小さき声への彼女の思いに焦点をあてた。もしウルフが二十世紀の終わりを見届けることができていたとすれば、そして英国社会の様々な分野での女性たちの活躍を目の当たりにしていたら、彼女はある程度の満足感を覚えていたのではないだろうか。今の日本で毎日のようにニュース項目になる性的嫌がらせの問題も、見方によっては、女性が強くなればこそ、女性の地位が上がったればこそと考えられないこともない。

なお「両性具有」のテーマは、その大きさから次回に譲ることにし、同時に、ウルフの自殺についても若干の考察を加えてみたい。

今回の「声なき女性たち」の分析を通じて、彼女の思いが我々にも確実に伝わっていることを、今、感じている。

## 注

- 1 James Joyce (1882-1941) イギリスの小説家。代表作は1922年の『ユリシーズ』。
- 2 物語の筋や性格描写に重きを置く伝統的な作風ではなく、人間の真実は意識の現場において刻一刻と立ち現れ流れ去る印象の全体にこそあると考え、流れ去るものとしての「生活」・「人生」の永遠の真理をとらえようとする技法。登場人物はそのときどきの意識に映った印象や心象の集積として描かれ、風景描写も印象派の絵画のようにイメージの無数の重ね塗りのように描かれる。
- 3 the Ouse 疎開先サセックス州ロドメル of 自宅近くの川。
- 4 odtaa “one damned thing after another” の頭文字をとってつけられたクラブの名前。John Masefield の小説 *Odtaa* からとったものである。
- 5 Lyndall Gordon, *Virginia Woolf* (Oxford, Oxford University Press, 1984), 182.
- 6 Oxbridge オックスフォード大学およびケンブリッジ大学のような名門大学を指すが、ここでは、それを意識した架空の場所と考えてよい。
- 7 Virginia Woolf, Michele Barrett, ed. *A Room of One's Own* (London, Penguin Books, 1993), 38. 以下この作品からの引用はすべてこの版によるものとし、末尾の括弧内にページ数を記す。
- 8 George Macaulay Trevelyan (1876-1962) イギリスの歴史家。1940年トリニティカレッジの学寮長となる。『イギリス史』は1926年に出版された。

- 9 Lady Winchilsea (1661?-1720), Anne Finch, Countess of Winchilsea Pope, Shelley に影響された。彼女の詩は1928年に John Middleton Murry によって紹介された。
- 10 Margaret Cavendish, Duchess of Newcastle (1624?-1674) イギリスの女流作家。
- 11 Dorothy Osborne (1627-1695) 1655年外交官だったSir William Temple と結婚。未婚時代テンプル宛てに書いた7通の書簡集 (*Dorothy Osborne's Letters*)は1888年に出版され書簡文学の傑作とされている。
- 12 Aphra Behn (1640-1689) イギリスの女流劇作家、小説家。ウルフの友人Vita Sackville-Westによる伝記 (*Aphra Behn: The Incomparable Astraea*) が1927年に出版されている。
- 13 年収500ポンドは、1929年当時の約2000米ドルにあたるが、生活実感としては、ぎりぎりの生活ではないが贅沢というわけでもない収入と思われる。ウルフのエッセイの収入は年360ポンド、1928年に出版された『オーランド』による収入は2000ポンドであったと日記にははるされている。  
(*Diary*, 3:232)
- 14 Mary Carmichaelはウルフの分身のような架空の人物であり、*Life's Adventure* も架空の作品であるが、1928年にパースコントロールのパイオニアであったMarie StopesがMarie Carmichaelという名前で*Love's Creation* を出版したと関係があるのかもしれない。
- 15 Samuel Taylor Coleridge (1772-1834) イギリスの詩人、批評家。
- 16 Florence Nightingale (1820-1910) 裕福な家庭に生まれ育ったが、何か社会に貢献したいと看護婦になる。1853年ロンドンで施療所の婦長となり、同年勃発したクリミア戦争で、政府の要請により傷病兵の看護にあたる。女性の社会進出のモデルである。
- 17 1853年聖地エルサレムの管理権をめぐるロシア・トルコ両国が開戦。翌年トルコに加担したイギリス、フランス、サルディニアがクリミア半島に出兵、セヴァストポリを攻撃、包囲した戦争。
- 18 Sappho 紀元前600年ごろの古代ギリシャの女流詩人。
- 19 次の記述はこれが別の形で現実化したものと言えようか。作者のカダレについては注21を参照されたし。

*We finally laid our hands on a recent and very complete edition of Albanian epic poetry. With the names of the itinerant singers whose ballads were reproduced. We could publish a collection of the songs of other rhapsodes. That way epic poetry would have a thousand faces. Like the reincarnations of a single being by metempsychosis.* Ismail Kadare, *The File on H.* (New York, Arcade Publishing, 1998) 50- 51

- 20 Margaret Drabble (1939- ) 現代の代表的なイギリスの小説家。  
Looking back on the discovery of AROO, the novelist Margaret Drabble writes, "I read it with mounting excitement and enthusiasm. . . . A more militant, firm, concerted attack on women's subjection would be hard to find. I could hardly believe that a woman from her background . . . could speak so relevantly to my condition." Quoted in Ellen Bayuk Rosenman, *A Room of One's Own: Women Writers and the Politics of Creativity* (New York, Twayne, 1995)
- 21 Ismail Kadare, *The Three-Arched Bridge* (New York, Vintage Books, 1998) 38: 113-119. イスマイル・カダレ (1936 - ) はパリ在住のアルバニア出身作家・詩人で、1997年のノーベル文学賞候補の一人に挙げられた。
- 22 大憲章 王が人民の権利と自由を保証した英国憲法の基礎。
- 23 注19を参照のこと。
- 24 イスマイル・カダレ講演会 (1998年9月22日、於久留米石橋文化センター) 主催：復曲能「高良山」を上演する会。
- 25 Ismail Kadare, *The File on H.* (New York, Arcade Publishing, 1998) 60
- 26 同上 103
- 27 アドリア海東岸から内陸にかけての古代の地方の名。
- 28 カダレ『上掲書』108-110
- 29 Karl Busse (1872-1918) ドイツの詩人。
- 30 Anne Olivier Bell ed. *The Diary of Virginia Woolf* (London, Harcourt, Brace, 1983) IV, 186.
- 31 *ibid.*, V, 57
- 32 Lyndall Gordon, 259

### 要約

本稿は1929年に出版されたヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋』についての考察である。この作品には二つの大きなテーマがある。一つはイギリスの家父長制での文学、特に詩に、創造的にかかわろうとした努力の過程で、いかに女性が恵まれなかったか。もう一つは19世紀イギリスのロマン派の詩人・批評家のコールリッジによって紹介された文学的な意味合いでの両性具有についてである。ここでは第一のテーマのみに焦点をあてた。（第二のテーマは続編で述べる予定）

先ずウルフの講演の聴衆及び読者へのメッセージ、——女性はどのような分野であれ、自分の最も関心のあることに勇敢に立ち向かっていき、経済的自立に足るだけの収入を得ることによって自分で物を考える人になることが必要である——を紹介した。次に新世紀の幕開けのこの時に、ウルフのこのメッセージが我々に（男性・女性共に）どのような意味合いをもつのかを詳しく述べた。